

家庭と連携した情報モラル教育を どのように進めていくか？

—「伝わらない・届かない」を考える—

常葉大学教育学部
准教授 酒井 郷平

【ファシリテーター】

酒井 郷平 (さかい きょうへい)

博士(教育学) / 常葉大学教育学部 准教授

専門分野: 教育工学, 情報教育 (特に, 情報モラル教育)

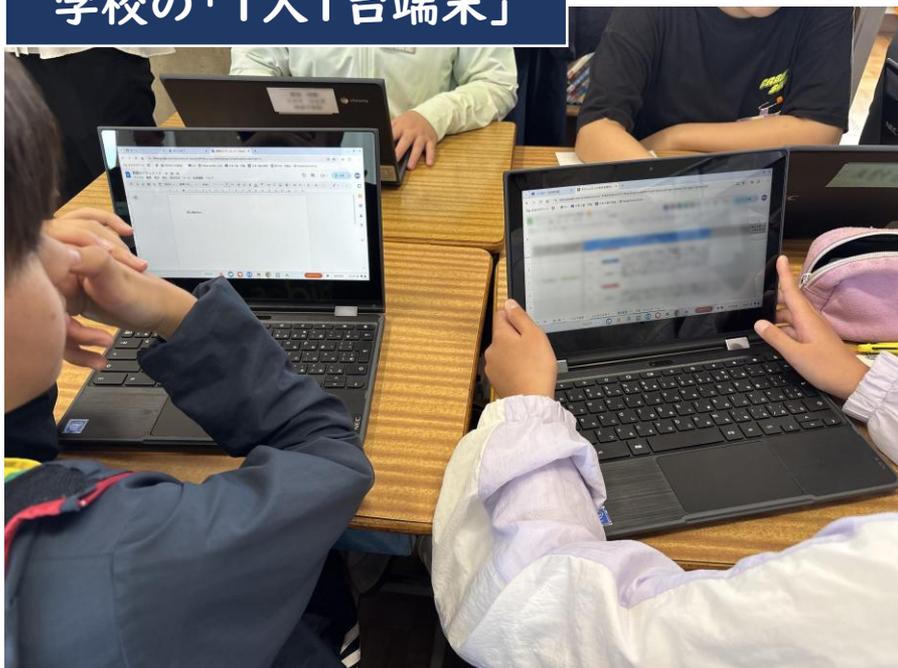
▶ 主な委員等

文部科学省委託事業情報モラル検討委員会委員 (2018年～現在)

文部科学省学校DX戦略アドバイザー (2022年～現在)

学校と家庭で広がる情報端末の利用

学校の「1人1台端末」



家庭の「スマートフォン・SNS」



一括りに「子供たちの情報端末の利用」といっても
「学びのツールとしての1人1台端末」や「プライベートのスマホ・SNS」等
その目的や使い方は異なる部分が多い

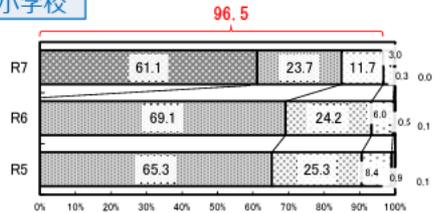
令和7年度全国学力・学習状況調査の結果から

小学校〔58〕
中学校〔58〕

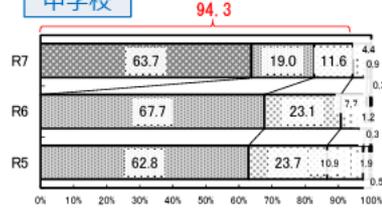
調査対象学年の児童〔生徒〕に対して、前年度までに、児童〔生徒〕一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業でどの程度活用しましたか。

- ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）
- ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）
- 週3回以上
- 週1回以上
- 月1回以上
- 月1回未満

小学校



中学校

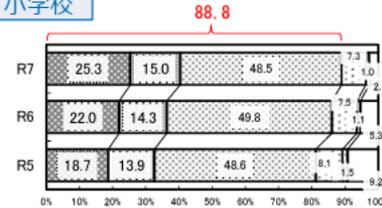


小学校〔66〕
中学校〔66〕

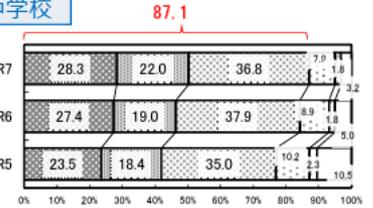
児童〔生徒〕一人一人に配備されたPC・タブレットなどの端末を、どの程度家庭で利用できるようにしていますか。

- 毎日持ち帰って、毎日利用させている
- 毎日持ち帰って、時々利用させている
- 時々持ち帰って、時々利用させている
- 持ち帰らせていない
- 持ち帰ってはいけないうちとして
- 臨時休業等の非常時のみ、持ち帰ることとしている

小学校



中学校

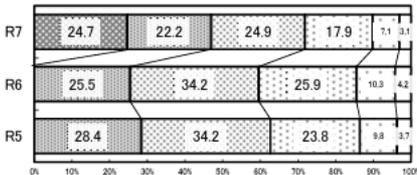


児童〔28〕
生徒〔28〕

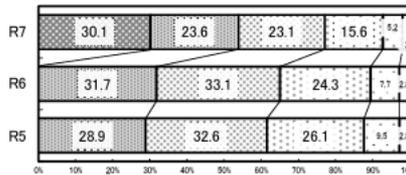
5年生まで〔1、2年生のとき〕に受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。

- ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）
- ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）
- 週3回以上
- 週1回以上
- 月1回以上
- 月1回未満

小学校

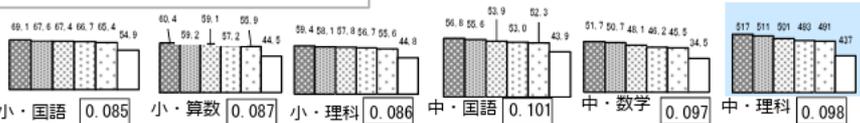


中学校



クロス集計

選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



文部科学省・国立教育政策研究所（2025）令和7年度全国学力・学習状況調査の結果（概要），p53より抜粋

クロス集計の結果，ICT活用頻度と教科の平均スコアに関連がみられた

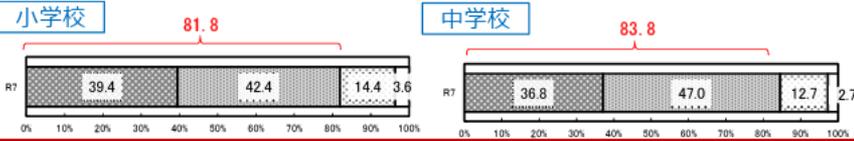
令和7年度全国学力・学習状況調査の結果から

児童〔29〕
生徒〔29〕

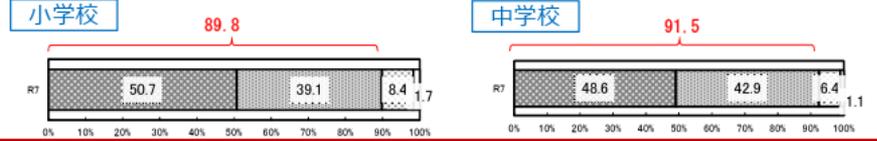
あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って以下のことができますか。（新規）

■ とてもそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない □ そう思わない

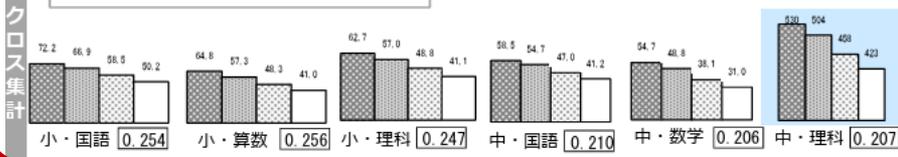
(1) 文章を作成する（文字、コメントを書くなど）



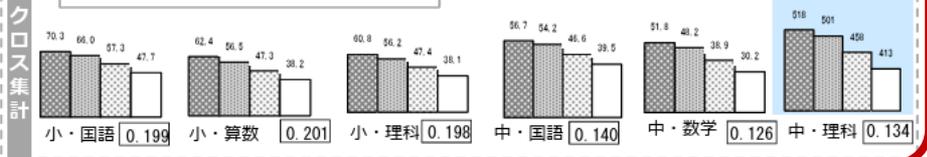
(2) インターネットを使って情報を収集する（検索する、調べるなど）



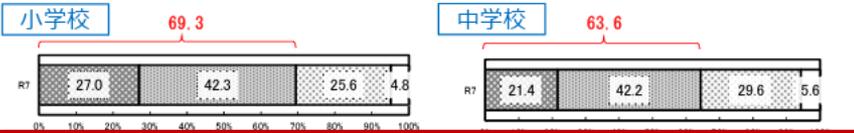
選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



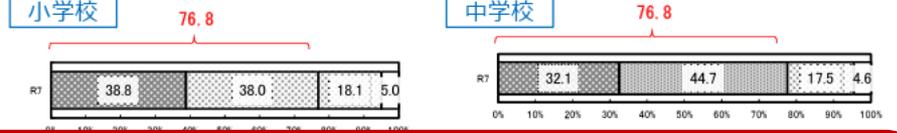
選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



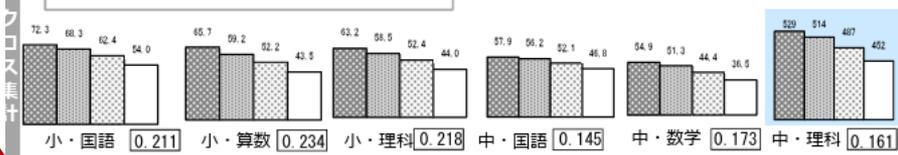
(3) 情報を整理する（図、表、グラフ・思考ツールなどを使ってまとめる）



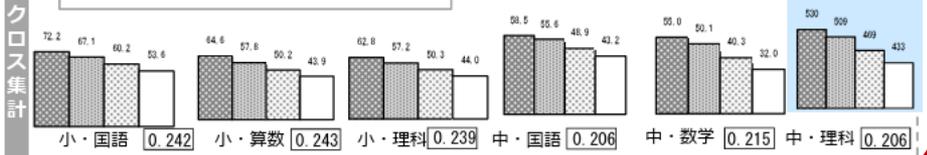
(4) 学校のプレゼンテーション（発表のスライド）を作成する



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



選択肢ごとの教科の平均正答率・平均IRTスコア



文部科学省・国立教育政策研究所（2025）令和7年度全国学力・学習状況調査の結果（概要），p55より抜粋

クロス集計の結果、ICT活用場面ごとでも教科の平均スコアとの関連がみられる

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果から

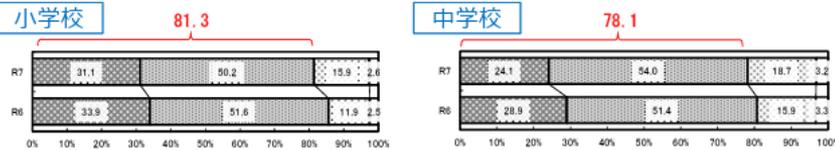
児童〔30〕
生徒〔30〕

5年生まで〔1、2年生のとき〕の学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、以下のことはあなたにどれくらい当てはまりますか。

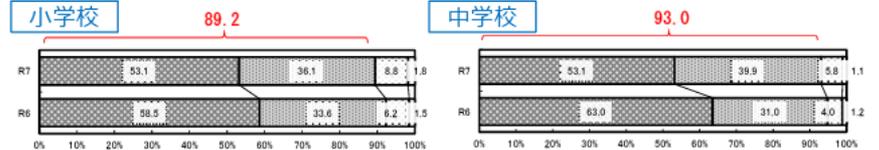
※中学校生徒質問調査では、7項目のうちランダムに選ばれた2項目に回答

■ とてもそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない □ そう思わない

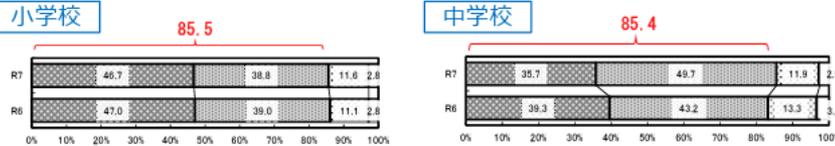
(1) 自分のペースで理解しながら学習を進めることができる



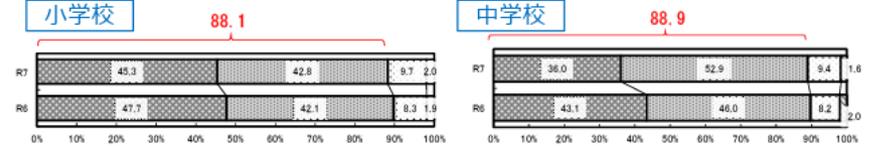
(2) 分からないことがあった時に、すぐ調べることができる



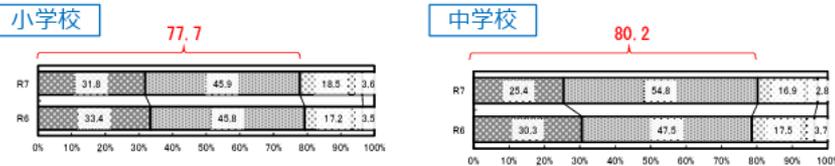
(3) 楽しみながら学習を進めることができる



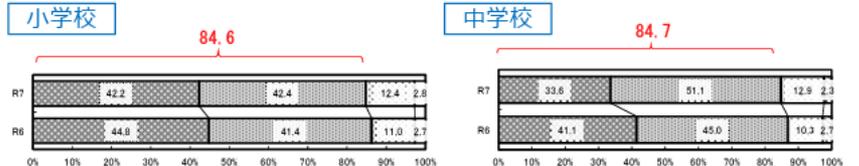
(4) 画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる



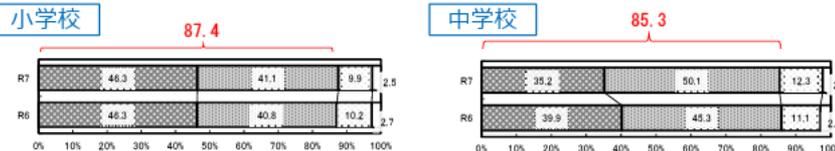
(5) 自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる



(6) 友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる



(7) 友達と協力しながら学習を進めることができる



ICTを活用することで学習への効果を実感している児童生徒も多くみられた

学校での情報活用能力の育成に向けた議論

幼児教育

小学校

中学校

高等学校

低学年

中学年

高学年

(1) 総合的な学習の時間に情報活用能力を育む領域を付加すべき。その際、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するという、探究の特質が十分に発揮されるよう留意すべき

(2) 探究の質の向上及び学校の負担軽減を図るため、実践の蓄積を可視化する形で、裁量性を維持しつつ、教員や児童・生徒が参照できる参考資料を作成すべき

(3) 中学校及び高等学校での実践の蓄積や、新たな枠組みの全体像を踏まえ、「目標」等の示し方を検討すべき。その際、小中学校での名称についても検討すべき

自発的な活動としての
遊びを通じた学び

生活科
※具体的な活動や体験を通じた学び

総合的な学習の時間
探究
※課題解決を通じて生き方を考える
+ 情報の領域 (仮称)

総合的な学習の時間

情報・技術科 (仮称)

総合的な探究の時間
※自己の在り方生き方と一体不可分な課題に取り組む

情報科
※小中の系統性を踏まえて情報科の内容を充実する方向で検討

各教科等 ※育んだ情報活用能力を各教科での探究的な学びを支え、駆動させる基盤としても活用

(4) 探究の質の向上を図る上で基盤となる情報活用能力の抜本的向上に向けて、技術分野の内容の大幅な充実を図るべき

(5) 情報技術は変化が極めて激しいことを踏まえ、教師の負担を軽減する動画教材等を国が提供・更新すべき

文部科学省(2025)小学校における情報活用能力の育成について, p2より抜粋

情報に関する学習の「量」をこなすから学習内容と結びつけた「質」の議論へ

学校と家庭で広がる情報端末の利用

学校の「1人1台端末」



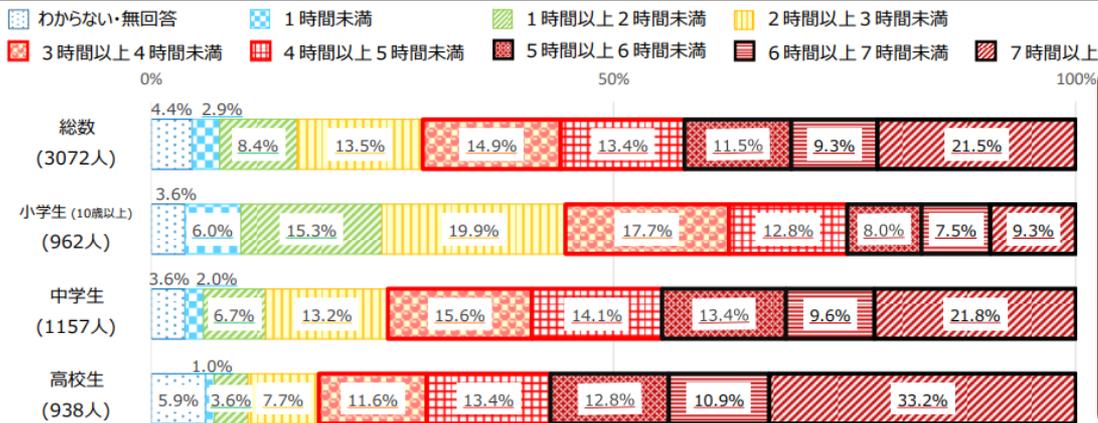
家庭の「スマートフォン・SNS」



一括りに「子供たちの情報端末の利用」といっても
「学びのツールとしての1人1台端末」や「プライベートのスマホ・SNS」等
その目的や使い方は異なる部分が多い

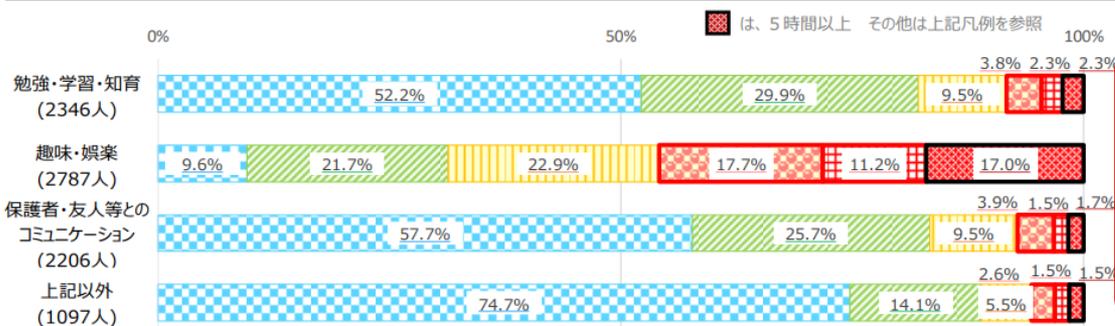
子供たちの利用状況

青少年のインターネットの利用時間（利用機器の合計／平日1日あたり）



	令和6年度			令和5年度			令和4年度		
	平均利用時間	3時間以上の割合	5時間以上の割合	平均利用時間	3時間以上の割合	5時間以上の割合	平均利用時間	3時間以上の割合	5時間以上の割合
総数 (3072人)	302.3分 (約5時間2分)	70.7%	42.3%	296.9分 (約4時間57分)	70.8%	40.1%	280.5分 (約4時間41分)	67.3%	37.4%
小学生 (10歳以上) (962人)	223.9分 (約3時間44分)	55.2%	24.7%	226.3分 (約3時間46分)	57.3%	24.0%	213.7分 (約3時間34分)	52.7%	24.2%
中学生 (1157人)	302.3分 (約5時間2分)	74.4%	44.8%	282.1分 (約4時間42分)	71.8%	39.7%	277.0分 (約4時間37分)	69.9%	36.7%
高校生 (938人)	379.4分 (約6時間19分)	81.9%	56.8%	374.2分 (約6時間14分)	81.4%	54.4%	345.0分 (約5時間45分)	78.0%	50.2%

目的ごとの青少年のインターネットの利用時間（利用機器の合計／平日1日あたり）



	平均利用時間		
	令和6年度	令和5年度	令和4年度
勉強・学習・知育 (2346人)	63.2分 (約1時間3分)	62.0分 (約1時間2分)	57.8分
趣味・娯楽 (2787人)	180.9分 (約3時間1分)	176.7分 (約2時間57分)	168.9分 (約2時間49分)
保護者・友人等とのコミュニケーション (2206人)	56.9分	55.1分	52.1分
上記以外 (1097人)	35.3分	39.7分	33.9分

(注1) 平均利用時間は、「使っていない」は0分とし、「わからない」「無回答」を除いて平均値を算出。(注2) 「利用機器の合計」の利用時間は、回答者が利用している各機器の利用時間を合算したものとす。

(注3) 平均利用時間・3時間以上と5時間以上の割合については、青少年に対して調査した7機器のうち、いずれかの機器でインターネットを利用していると回答した青少年をベースに集計。

回答数は、令和5年度 総数(3238人) 小学生(936人) 中学生(1241人) 高校生(1044人)、令和4年度 総数(3183人) 小学生(951人) 中学生(1211人) 高校生(1008人)

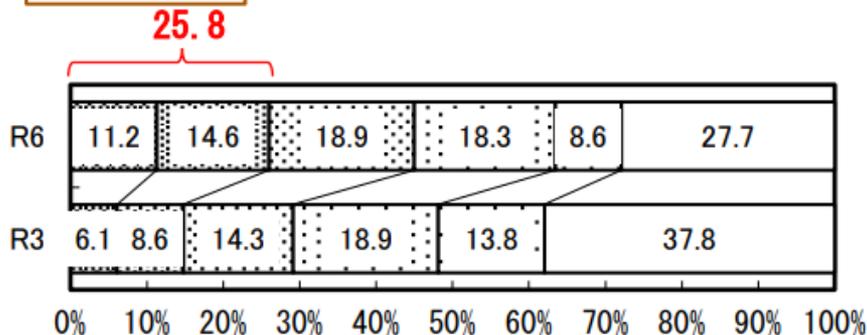
(注4) 参考 高校生の7時間以上33.2%の内訳は以下のとおり。7時間以上8時間未満7.5%、8時間以上9時間未満8.0%、9時間以上17.7% ※(人)の数字は回答者数を示す。(青少年 Q4-1、Q4-2)

令和6年度全国学力・学習状況調査の結果から

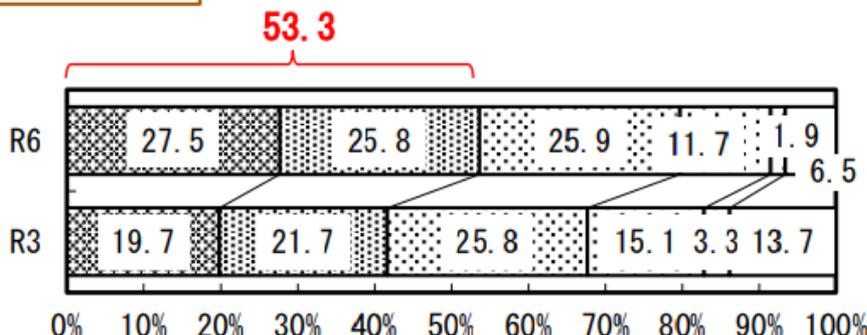
子供の1日の携帯電話・スマートフォンの時間

- 3時間以上
- 2時間以上、3時間より少ない
- 1時間以上、2時間より少ない
- 1時間より少ない
- 携帯電話やスマートフォンを持っているが、普段は使っていない
- 携帯電話やスマートフォンを持っていない

小学校

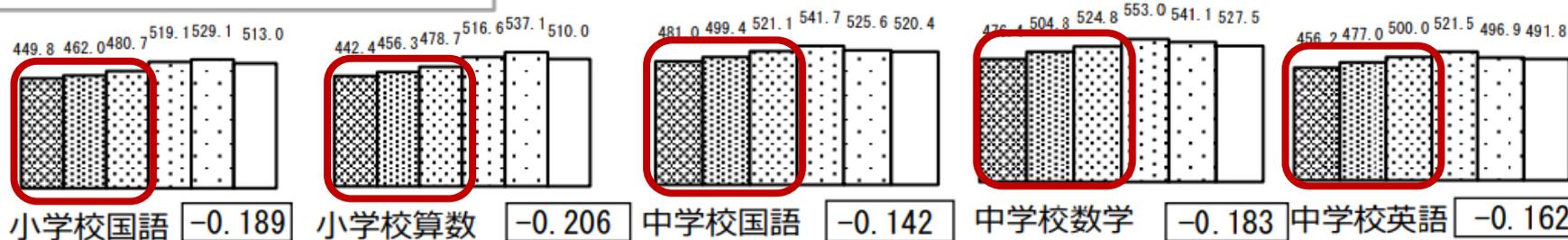


中学校



選択肢ごとの教科の平均スコア

クロス集計



文部科学省・国立教育政策研究所(2025)令和6年度全国学力・学習状況調査 経年変化分析調査・保護者に対する調査の結果(概要)のポイント, p2より抜粋

クロス集計の結果, 利用時間の増加と共に教科の平均スコアが減少傾向に

学校と家庭・保護者と連携しながら

子供たちの情報モラルを育てていくためには？

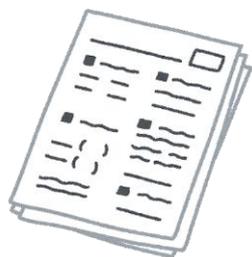
(主に長時間利用への対応は？)

学校でよくある「家庭との連携」での課題



【学校と家庭の認識での課題】

- ICTを使うこと自体に抵抗感を持っている家庭
- 「うちの子は大丈夫」という安心バイアス



【コミュニケーション段階での課題】

- プリントを配っているが読まれない
- 他にも情報が多く、情報過多になってしまう



【組織としての連携での課題】

- 保護者会には特定の人しか来てくれない
- 学校と家庭でどこまで責任を負うかが不明確

「家庭との連携」で大切にしたいポイント

- ① **認識のズレ**を可視化・共有する
 - － 学校と保護者, 保護者と子ども, 保護者同士

- ② 「手段」ではなく, **「文脈」**を意識した発信
 - － 「一緒に考える」機会を作るメッセージへ

- ③ 子供たち自身の**「自律」**を促す
 - － 当事者である子供の姿も大切な要素

「家庭との連携」で大切にしたいポイント

- ① **認識のズレ**を可視化・共有する
 - － 学校と保護者, 保護者と子ども, 保護者同士
- ② 「手段」ではなく, **「文脈」**を意識した発信
 - － 「一緒に考える」機会を作るメッセージへ
- ③ 子供たち自身の**「自律」**を促す
 - － 当事者である子供の姿も大切な要素

ICTに対する保護者の不安



学校でも家でもICTばかり使って
問題が起きるんじゃないかしら

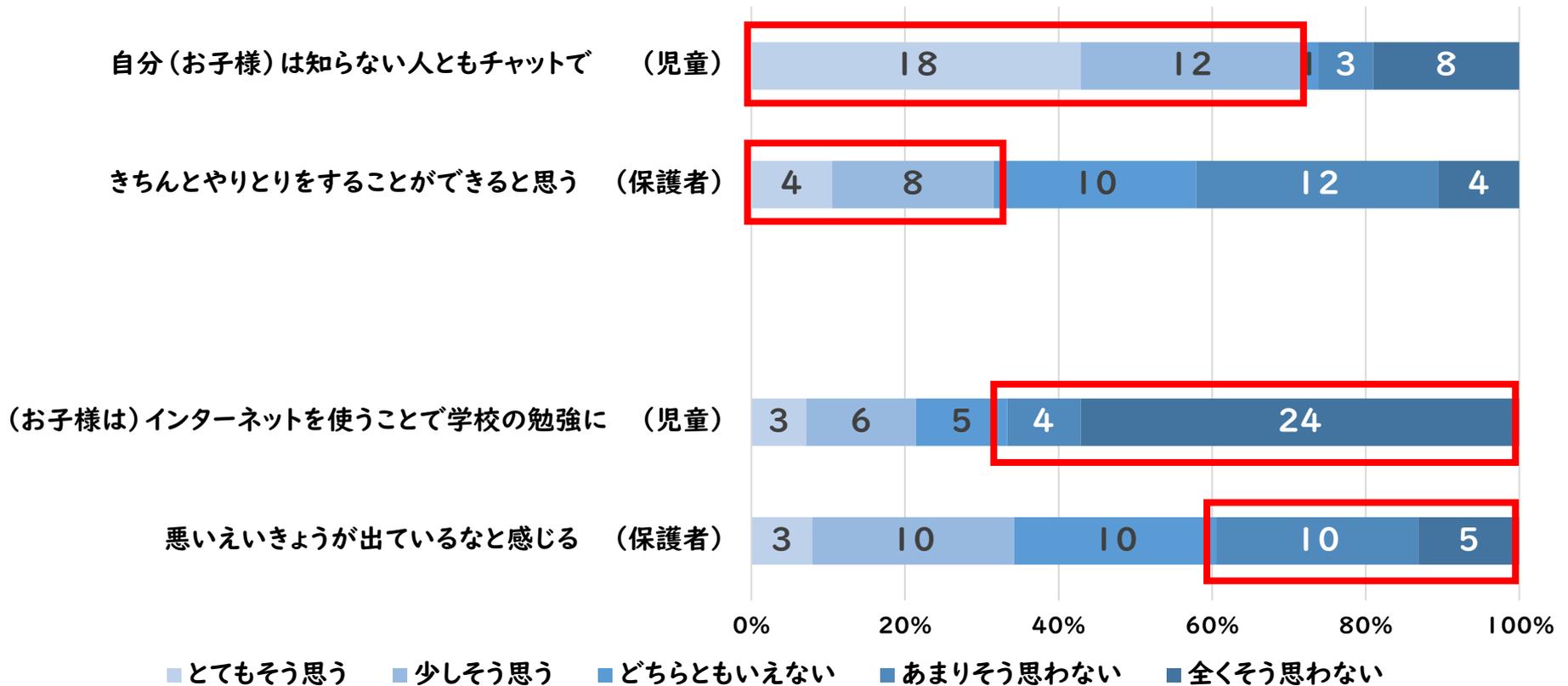
ICTは使わせない方が
いいんじゃないかしら

保護者は、「学びのツール」としてのイメージが持てない場合も多く、
実際に**子供たちが学びにどのように使っているのかを知る**ことも大切

保護者と子どもたちの感覚の差を可視化

○児童と保護者の回答比較（小学校5年生の児童と保護者の回答）

※常葉大学酒井研究室の調査より

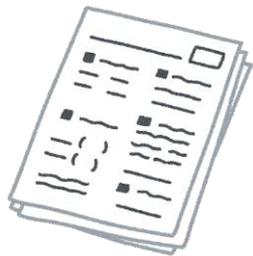


子供と保護者間にある**感覚のズレ**の共有が大切

「家庭との連携」で大切にしたいポイント

- ① **認識のズレ**を可視化・共有する
 - － 学校と保護者, 保護者と子ども, 保護者同士
- ② 「手段」ではなく, **「文脈」を意識した発信**
 - － 「一緒に考える」機会を作るメッセージへ
- ③ 子供たち自身の**「自律」を促す**
 - － 当事者である子供の姿も大切な要素

「届かない」の例



保護者にはお知らせしているのに届いている気がしない...

スマホに直接お知らせした方が...

「方法」を変えれば、保護者は読んでくれるのか？
「お願い」だけではなく、「考えてもらう」ことが連携になるのでは？

家庭へ情報モラルに関するメッセージを送る方法ではなく、
“どのような文脈で伝えるか”がポイントに

【実践事例】家庭で子供と一緒に考える工夫

かてい 家庭のルール	
①たんまつ <small>つか</small> を使ってもよい時間 <small>じかん</small> は、	じ時 ぶん分 ~ じ時 ぶん分
②たんまつ <small>つか</small> を使ってもよい場所 <small>ばしょ</small> は、	

ひと かんが おうちの人と考えたルール	
①	③
②	④

くふう	
①たんまつをじゅう電 <small>でん</small> しわすれないためのくふう	
②たんまつを家 <small>いえ</small> におきわすれないためのくふう	

“子供が学校で書き込んだもの”を持ち帰らせることで、
保護者が目を通し、家庭で考えるきっかけにも。

「保護者会」に限られた人しか来ない

「保護者会」を“学ぶ場”ではなく，“話す場”として設計する



「情報モラルを学びましょう」だけではなく、

- ・保護者同士で悩み事の共有する
- ・来ない保護者に対するアプローチを考える
- ・学校, 家庭, 地域としてのメッセージを考える

「学びに来てください」ではなく、

「**共育**」としての関わりを考える場へ

「学校が結論を与える」という形式だけではなく、
「学校－保護者」「保護者－保護者」が共に考える機会にしておくことも大切

家庭で一緒に考えられる情報モラル教材

じょうほう 情報モラル 学習サイト

～スマホ・タブレットやネットを上手に活用できるかな?～

- 情報モラルとは、みなさんが情報社会の中で上手に生きていくために必要な考え方や態度のことです。
- このサイトでは、写真やイラスト、動画をしながら約3つの段階に挑戦することで、情報モラルについて学ぶことができます。
- 活用場面ごとに、いろいろな問題に挑戦することができます。それぞれ約5分～10分で学習できます。
- 小学4～5年生～高校3年生が対象です。推奨学年にこだわらず、学びたいものを自由に学んでみましょう。

 タブレットを初めて使う	 インターネットを活用する	 SNS情報を発信する
 オンラインで交流する	 デジタル作品を作る	 マナーを守って使う
 健康に気を付けて使う	 SNSなどを使う	 情報を確かめる
NEW  生成AIを活用する		

なからはじめれば良いかわからないときはコチラ!

 **おすすめコンテンツ診断**

本サイトのコンテンツ一覧表はこちらです。



子供たちが活用できる情報モラル教材の紹介・体験や
どんな時に使えそうかを共有する

「家庭との連携」で大切にしたいポイント

- ① **認識のズレ**を可視化・共有する
 - － 学校と保護者, 保護者と子ども, 保護者同士
- ② 「手段」ではなく, **「文脈」**を意識した発信
 - － 「一緒に考える」機会を作るメッセージへ
- ③ 子供たち自身の**「自律」**を促す
 - － 当事者である子供の姿も大切な要素

ルールを守るための工夫を考える

他律とは

自分の意志ではなく、**他人の命令**などによって行動する

自律とは

常に、自分の意思で**判断**しながら、行動する

いつまでも「他律」（ルールを守らせる）だけでよいのか？

自律を促すためには、子どもに「工夫を考えさせる」こと

【事例紹介】ルールを決めるから「自律」へつなげるために

「ルールを守りなさい」だけでなく

「そのルールは、どう工夫すれば守ることができるのか」

「勉強中は、スマホを触らない」

このルールを「破りそうになるとき」は？

－ 相手から、LINEが届いたとき

－ スマホのランプの点滅が見えてしまったとき

これらを防ぐためには、どんな「工夫」が考えられますか？

【事例紹介】子供たちが依存尺度を作成する実践（中学生）

ワークショップの手順

1. 子どもたちの経験から**依存していると思う事例**を考えさせる。
2. 小グループで議論を通して**依存事例を依存度の高いと思われる順番で並び替え**させる。
3. **依存度の「大」「中」「小」に分けさせる**ことでグループごとに**依存の尺度を作成**させる。

【事例紹介】子供たちが依存尺度を作成する実践（中学生）

実際に作成された尺度

Aグループ

オンラインゲームに多額の課金をしてしまう

食事中もずっとさわってしまう

気がついたら時間がたっている

自転車に乗りながら使う

会話している時に使う

つねに動画や音楽を見ている

勉強をしていてすぐにケータイをしてしまう

メールをすぐに気にしてしまう

真夜中にメールをしてしまう

Bグループ

ネットができなくなると生活に大きな影響が出る

布団に入って3時間使う

5分に1回スマホにさわる

禁止されているのにLINEをやる

1日に5時間ネットを使う

食事中にスマホを使う

ひまがあればスマホ・ケータイをさわる

スマホやゲームをしていて時間がわからなくなる

トイレにケータイを持っていく

「使いすぎの状態」は人によって違うことを認識することで、

「**自分も使いすぎていたかも**」という自覚を促すことを目指した取り組み

「家庭との連携」で大切にしたいポイント

- ① **認識のズレ**を可視化・共有する
 - － 学校と保護者, 保護者と子ども, 保護者同士
- ② 「手段」ではなく, **「文脈」**を意識した発信
 - － 「一緒に考える」機会を作るメッセージへ
- ③ 子供たち自身の**「自律」**を促す
 - － 当事者である子供の姿も大切な要素

江戸川区立第四葛西小学校

校長 伊藤 秀一 先生

情報モラルは「モラル」の延長

教員の意識化

学び方スタンダード

家庭学習	返事	聴き方	話し方	姿勢	挨拶	着席	持ち物
学年ごとに時間を決めて家庭学習に取り組みます	名前を呼ばれたら「はい」と返事をします	静かに話を聴きます。最後まで話している人を見て、最後まで言葉づかいで話します	声の大きさを考えて、ていねいな話し方をします	背筋を伸ばした姿勢で座ります	あいさつをします	授業の始めと終わりに席に着きます	前日に必要な学習用具を準備します

学び方スタンダードとは

「学び方スタンダード」とは、確かな学力の向上を図る上で、一之江小学校の全ての児童に必ず身に付けてほしい学習習慣の根幹となるものです。



管理職がビジョンを示す

「あいさつ」から始めよう

- 自分から
- 目を見て
- 元気
- あいさつを



- ・学校経営案に示す
- ・自己申告に位置付け
- ・児童は毎月チェック

児童の意識化

朝の挨拶運動



日直は挨拶当番

日頃からのモラル・マナーの浸透

履き物をそろえる



「情報モラル」は“特別なもの”ではなく、

「日常のモラル」が基礎であり、基盤となることを意識化

(情報モラルの不易と流行)

子供を中心とした「共に育てる関係」

保護者を巻き込む



学校公開で
情報モラルの
授業を実施

<保護者>
情報モラルについて一緒に考える機会

<教師>
授業作りを通じた情報モラルの理解

子供たちのために一緒に考えるきっかけを提供していく

保護者を巻き込む



電子ドリルの課題を見てもらう
↓
児童のタブレットを開いてもらう

親子で取り組む

保護者様へ
江戸川区立第四基西小学校
校長 伊藤 秀一
生活指導担当
ふれあい月間「親子で情報モラルを考えよう」の取組み



親子で一緒に考えてもらう
(静岡大学 塩田研究室のページ)

「家庭への周知・お願い」だけではなく、

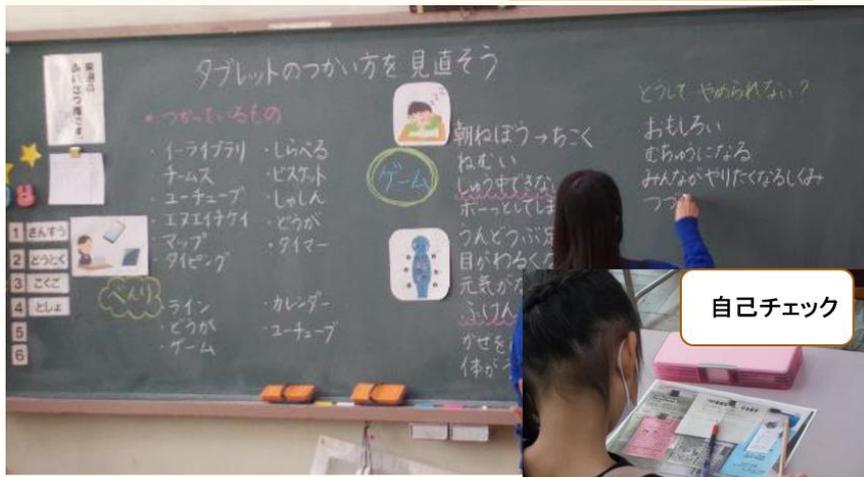
「保護者も学習者として学び、考える機会」を創出

(子供たちが学んでいること、考えなければいけないことを明確化)

保護者を巻き込む目標設定と振り返り

保護者を巻き込む

目標設定と振り返り



自己チェック

自分が行った「守る宣言」をもとに振り返り

保護者を巻き込む

目標設定と振り返り

はやね・はやおき・あさごはん
じゆうかんカード

あさ おきるじかん → じ らん → よる ねるじかん → じ らん
テレビ・スマホ・タブレット・ゲームなどを つかうじかん → じかん らんまで
☆らにちかん、できたら〇、できなかつたら×をつけましょう

「SNS家庭ルール」守る宣言
一之江小学校 年 組 名前
私はタブレットを使うときの約束を守ります!

なつやすみかていルール

インターネットやネットゲームのやくそく

かてい生活のやくそく

- 生活習慣改善週間
- 保護者会
家庭ルール作りの依頼
- 学校公開
授業の参観・講演会の実施
- 学校だより
- 長期休業中のルールチェック
- 個人面談
家庭ルールの見直し
状況把握、悩み相談

「子供だけ」の目標設定とふりかえりではなく、
「家庭として目標設定・ふりかえり」を行うことで子供の状況把握にも
(情報モラルは個人だけではなく、家庭の単位でも考える必要が)

「家庭との連携」は「学校から伝える」だけではない



“困りごと”の共有と共感から、共に育てるへ

学校でのICT活用と家庭でのスマホ・SNS利用では、目的や課題が異なる可能性も。

<家庭との連携に向けて>

① 子供たちは身近な大人から影響を受ける

⇒ 日常モラルの醸成や大人が情報モラルを考える機会

② 保護者が問題を体験し、考えるきっかけづくり

⇒ 子供たちの学びの可視化、目標設定、ふりかえり

③ 子供たちの「自律」を助けていく存在として

⇒ 情報活用場面を見せる、ルールづくり、家庭の役割